



フィリピンにエスパーニヤの町を探して

時代の忘れ物

ビガンのセント・ポール教会。聖堂正面の中段に狛犬が4匹並んでいる



【文】.....佐保暢子

【写真】.....南信之

若きコンキスタドールの町

パスポートもビザもいらさない。パトロンと度胸さえあれば、どこにでも行ける。これは大航海時代だったらの話である。陸地を見つけたら、上陸して「私の土地だ」と宣言すれば、力づくでその地を手に入れることができた。「新大陸の発見」というお題目によってそれが許された時代だった。

フィリピンのルソン島北部の町、ビガンはその当時、「ピラ・フェルナンディア」という名だった。1572年、メキシコ生まれのスペイン人、ジョアン・デ・サルセドがルソン島北部に上陸。ビガンを政治、布教の中心地に定め、スペイン国王フェリペ2世の息子、フェルナンドの名前を取って「ピラ・フェルナンディア」と名付けて、





イロコス 大航海



強化され、鎖国令が敷かれ、キリシタンが大量に亡命した激動の時期だ。しかし、この文書はただ船旅の無事を祈願したものの。それを伝えると彼は少しがっかりした様子だった。でも、確かに我々の祖先がここを訪れている。

マニラと又エバ・エスバーニャ(メキシコ)のアカブルコ

の日本人が思い描いた世界地図は今とずいぶん違っただろう。

今では想像もつかないが、このひなびた小さな田舎町のピガンは、スペイン人が訪れる前からすでに海のシルクロードの中継点として中国人が入植し、原住民との混血が進んでおり、日本や韓国からも貿易船が訪れる交易地だった。ピガンの旧家を利用した小さな博物館(アヤラ・ミュージアム)に、日本と中国の交易船の模型がある。博物館の職員が読んでほしいと指さした日本語の古文書のコピーには、「寛永」と書かれていた。寛永年間、徳川家

を結ぶガレオン船の交易が始まるのが十七世紀初頭。又エバ・エスバーニャからフィリピンへ銀と修道士が運び込まれ、フィリピンからは東南アジアの香辛料、中国製の絹、麝香、陶漆器、日本の漆器などが輸出されていた。一六世紀のスペイン人による侵略、二〇世紀には日本軍に侵略された。凄惨な時代を経験したが、今では田園が広がり、教会のある小さな町が点在するのどかなところである。

スペインのよつなチャイナタウン

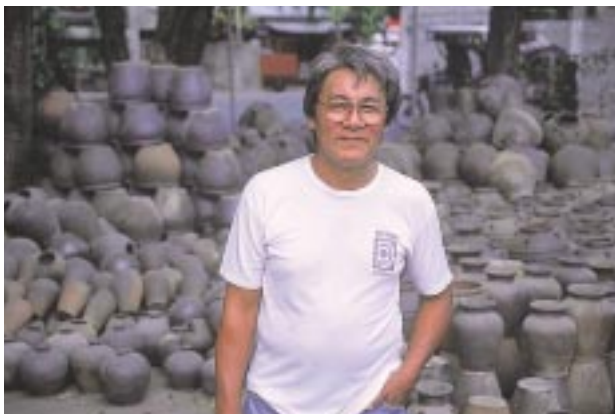
クリーム色の外壁が眩しいセント・



【右】家の扉には、魔よけとして使う中国道教の八卦鏡とキリストとマリアが仲良く並ぶ
【下】ピガンの夜は早い。午後8時のオールドタウンは人影もまばら

フェリペ2世に献上したのである。このジョアン・デ・サルセドはピガン占領当時、わずか二十歳の青年。マゼランの死後、セブに上陸して植民地化に成功したレガスピを祖父に持つ、コンキスタドール(征服者)のサラブレッドだったようだ。

「ピラ・フェルナンディア」が生まれたのは、マゼランが世界一周達成を目前にして、今やフィリピンのリソート地となったあのセブ島で原住民の毒矢に倒れた二十年後のこと。日本は織田信長の時代で、キリシタン大名が誕生し、日本でのキリスト教布教活動が盛んになっていた頃だ。きつとあの頃



【右上】カビツの「障子」は室内インテリアにも使われる
 【左上】父親を継いで登り窯を守る呉さんは中比のハーフ
 【左下】町周辺の農村では、家で女たちが機織りの内職

ポール教会が、ピガンの町のヘソ。この教会を挟むようにサルセド広場とバルガス広場があり、この二つの広場の南側にスペイン風の古い町並みが残されたオールドタウンがある。半日以内で隅から隅まで回ることができるほど小さい。唯一、昔ながらの石畳が残るメナ・クリスゴ・ストリートに土産物屋などが並び、スペインと中国とフィリピンの土着文化が交ざった独特の雰囲気を楽しめる。

オールドタウンの古い建築物は、今でも店舗、住居、学校として利用されている。熱帯の強い太陽光線に晒されているとなんだか懐かしくなってくる。二階部分の窓が日本の障子のよう

な形をしているからかもしれない。思わず「紙でできているのか」と通りすがりの人に聞くと、「紙だって？」と笑われた。確かに台風が多いこの地域で雨風がしのげない紙の窓なんて作るわけがない。

私のこの素朴な疑問は、メナ・クリスゴ・ストリートにある家具屋で解けた。実は障子の紙に見えた格子の間に張られた白い物は、カビツとよばれる貝殻。若い職人が切りそろえた貝殻に糊を塗って、格子にはめていた。オールドタウンはスペイン風の建物

が立ち並ぶが、実は地元では、カサンライヤン（中国人の住む町）と呼ばれ、この地方の経済を握った中国人商人の居住区だった。ピガンの陶器職人、大工もほとんど中国人だったそうで、町の西南部にある陶器工場には今も中国式の登り窯があり、中国人の末裔がピガン名物の大きな瓶を作っている。作業場には大きな水牛がいて、大きな窪みの中でぐるぐると回って土を練り、半裸の職人たちが大きな轆轤ろくろを回している。きつと昔と全く変わらぬ光景なのだろう。

気になるのはこの瓶の中身になる物。これはイロコス地方の地酒、バシー（Basi）だ。サトウキビとサマックというこの地方の植物を主原料に造る甘い発酵酒で、その昔、スペイン人に販売を独占され、現地の人々が「バシーの乱」を起したこともある、いわく付きの酒でもある。ピガンの酒屋や土産物屋で買える。味は、甘味が強い梅酒のよう。当時、スペイン人も酔ったこの





【右上】世界文化遺産に登録されたパオワイ教会
 【右下】朽ちかけた聖堂の中で今も人々が祈りを捧げる
 【左】外壁のレリーフがオリエンタルな雰囲気だ



酒口当たりもいいので、つい飲みすぎて目が回る。

古い町並みに不似合いなオートバイがやたらと多いのが残念だが、昔ながらの馬車も庶民の足としてがんばっている。ピガンのどの街角でも、御者が鳴らすベルと蹄の音が聞こえる。登下校の時間になると、制服姿の可愛い女子高生たちが乗り込んで、心なしか馬車の足取りも軽い。馬車は観光客のために観光スポットを半日かけて回るサービスもしてくれるので、もし時間があれば、馬車に乗って町を回るのも一興だ。決まった料金はなく、50〜200ペソと御者によってピンキリなので、何人かと交渉する方がよいだろう。

スペインの足跡を追って

イロカーノ（イロコス地方の人々）たちがいうハイウエーは、舗装された二車線の田んぼ道。高速で走るから「ハイウエー」なのかもしれない。

国際空港がある北イロカーノ州のラウグと、南イロカーノ州のピガンはこのハイウエーを飛ばして約1時間半。バスや車を有効利用すればイロコス地方の移動は、さほど不便ではない。ハイウエー沿いの村や町には、スペイン人が残した、遺跡のような教会が今なお

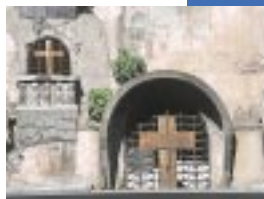
残っている。遺跡といっても、今も人々がミサに訪れる現役の教会だ。

ラウグから車で十五分ほどのパオワイにある十八世紀初頭に建てられたパオワイ教会は、実に面白い形をしている。地震の多いこの地方独特の「Ethnquake Baroque」と呼ばれる作り。珊瑚から作ったブロックを漆喰で固めた分厚い壁と、聖堂を両脇から挟むようにある支柱が耐震用のだろう。どんな大砲でも崩れることがない要塞にも見える。過去二回の地震になんとか耐えてきたそうだ。

この教会は、「ゴシックとバロックの要素を併せ持つほか、中国と日本の影響もある」といわれる。果たしてどこに日本の影響があるのか。教会の正面に近づいて、しばらく眺めてみた。野草が生えた外壁の上に彫られた人物は東洋人の男に見えるような……。誰が何を意味して彫ったのだろうか。正面中央にある像も壁にめり込むように生えた木に埋もれている。残念ながらこの貴重なレリーフはこのままでは雑草の中に消える運命にあるようである。

イロコスの「英雄」

イロコスといえば、忘れてはならない人物がいる。その人物とは、フェル



【上】地中に沈みつつあるベルタワー（ラウグ）
 【中】ベルタワーの入口はすでに半分が地下
 【左】北のマラカニアン宮殿

ディナンド・マルコス元大統領だ。政治スキャンダルが多く、悪いイメージばかりの人物だが、彼が生まれ育ったイロコス地方では今でも「英雄」である。確かにこの地で彼の足跡を辿ると、彼の別の一面が見えてくる。

パオアイの付近には、マルコス一家が夏に過ごした「北のマラカニアン宮殿」と呼ばれる別荘がある。一般公開されており、自由に参観できる。豪華な生活ぶりでは有名なイメルダ夫人から豪華絢爛な御殿を連想しますが、北のマラカニアンは意外にも「質実剛健」といった雰囲気。木造「階建ての伝統的な家屋で、大変落ち着いた瀟洒な別荘である。

また、ラウグから車で十五分ほど南西（パオワイ北部）のパタックには、マル

コス氏が子供時代を過ごした家がマルコス・ミュージアムとして公開されている。幼少の頃は神童、学生時代はフィリピン国立大学きつての秀才と呼ばれた彼の遺品を見ることが出来る。ただ、古ぼけた室内に若い頃のマルコス氏に似せたマネキンがずらりと並んでいて、正直なところうす気味悪い所でもある。

しかも、マネキンだけではなく実物のマルコス氏と対面することも可能だ。ミュージアムの脇の小さな建物にイメルダ未亡人が亡命先のハワイから連れて帰った彼の遺骸が安置されているのである。蠟人形のようなマルコス氏はガラスケースの中でライトアップされ、荘厳なクラシックのBGMが鳴り響く中、イロカーノの墓守に見守られて静かに眠っている。ただ、「独裁者」にしては、安置室は小さすぎる。むしろ、故郷の家に寄り添うように置かれている所が心なしか虚しい。

マルコス氏は1965年に当時現職の大統領ディオスタド・マカパガル氏を取って大統領に就任し、以後、二十一年という長期「独裁」政権を築いた。

このほど新大統領に就任したアロヨ・マカパガル女史はこのマカパガル氏の娘だ。マルコス氏の奥方、イメルダ未亡人は92年、98年の二度に渡り、大統領

領選で落選しているから、故郷イロコスに眠るマルコス氏はもしかすると心中穏やかではないかもしれない。

ラウグ周辺のビーチリゾート

南シナ海に面した南北イロカノ州は残念ながら黒っぽい砂浜が多く、波も荒いので、タイなどの南国のビーチを想像するものがっかりかもしれない。ただ唯一、白砂の美しいビーチがパグドブッドだ。

観光開発があまり進んでいないので、周囲には半農半漁で生計を立てる昔ながらの農村が点在している。漁師たちがビーチに船を上げて、取れたての魚を刺し身にして食べたり、網を直す姿が見物できるだろう。ビーチの裏に回ると、ジャングルのすき間を縫うように耕された田んぼの回りに椰子の葉で屋根をふいた小さな家が点在している。村の子供たちは外国人が珍しいのか、私たちを見ると家から飛び出してくる。追いかけてきた。「アメリカカーノ!」。彼らは我々をアメリカ人と呼んだ。どう見てもアメリカ人には見えなれないと思うのだが、おそらく子供たちにとつて「外国」アメリカに違いはない。エスパーニャの面影はもはや人々の心には残っていないようだ。

大航海時代の忘れ物

アクセス

香港 ラワグ間にフィリピン・エアのチャーター便がある 4月末まで 飛行時間は約1時間半。
 康祥旅遊 (852)2730-3008
 マニラ ラワグ間は、ラワグ・インターナショナル・エアラインが毎週水金日に各1便。
 マニラからは長距離バスでビガンまで約9時間。

ツアー

フォートイルカンディアホテルで周辺のツアーに参加できる。マルコス元大統領用に作られたパオワイ・ゴルフクラブ(6984ヤード、18ホール、パ-72)でのゴルフツアーもある。

通貨

ラワグ国際空港にはオフィシャルな両替屋はない。ホテルでの両替はレートが悪いので、銀行で換金するのが手数料はかかっても得。ラワグの銀行の国際ATMも利用できるが、機械によって使えるカードが違っているので、当座の金は換金して持参することをおすすめする。



【左】パグドブッドの白い砂浜
 【下】どこの村も子供だらけ



現地料理にスペインと中華が交ざったものの、美味しい調和はあまり期待できない。イロカノ料理は、骨付きの豚のもも肉をカリカリに揚げた Crispy Pata (クリスピーパタ)、牛肉をカリカリに揚げた Tapa (タパ)、豚肉の脂身部分をカリカリに揚げた Bagnet (バグネット) とカリカリ系が多い。肉料理は鶏やヤギもあり、モツ料理も少なくない。野菜と豚肉の煮物の Pinabet (ピナクベット) などのタマゴ炒めの Puqui-pouqi (ポキボキ)、ミルクフィッシュのグリル Bangus (バンガス) などは日本人の口にも合うだろう。味の基本は蝦醬(エビの発酵ペースト)と椰子で造ったバームビネガー。フィリピン風ソーセージの Longanisa (ロンガニーサ) もバームビネガーにつけて食べる。また中華系の麺類は多く、いわゆるビーフンの Bijon (ビホン) や、つゆ麺の Lomi (ロミ) や Mami (マミ)、かつお節と黄色のソースをかけたスパゲッティー風の Palabok (パラボック) などいろいろある。

マルコス元大統領が娘の結婚式のために建てたホテル。小規模だがカジノがあるほか、マルコス氏も遊んでいたサンドバギーも楽しめる。香港や台湾からのツアーあり。日本、広東、韓国料理が揃えたレストランもある。周辺のツアーはホテル内の旅行社カウンターで。



イロカノ料理が食べられるレストラン

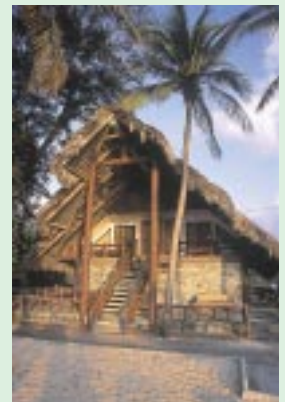
ラワグ / Laoag
 La Precisa
 Jose Rizal Street と Harnando Avenue の交差点。
 上品なイロカノ料理が味わえるラワグの有名レストラン。
 ビガン / Vigan
 Leona Cafe
 Plaza Burgos から Mena Crisologo Street に入ってすぐ。
 町一番の洋食屋さん。イロカノ料理のほか、西洋料理、日本の寿司まである(ただし板前はフィリピン人)。

ホテル

ラワグ / Laoag
 Fort Ilcandia Hotel / フォートイルカンディアホテル
 Brgy. 37 Calayab, Laoag City, Ilocos Norte, Philippines
 TEL:077-772-1166 / TEL:(632)523-9716(マニラ)

パグドブッド /

Pagudpud
 Saud Beach Resort & Hotel
 / サ우드ビーチリゾート
 TEL:077-764-1106
 マニラオフィス
 TEL:(632)921-2856
 ビーチ沿いに離れのコテージがある静かなホテル。ラワグから車で約1時間半。公共バスで行くと途中でバイクに乗り換えが必要。



ビガン / Vigan

小規模な宿のみ。Mena Crisologo Street 周辺のオールドタウンに昔の建物を利用した宿が数軒ある。